

帝京大学文化財研究所 研究報告執筆要綱

(編集委員会)

第1条 「帝京大学文化財研究所研究報告」の編集委員会は帝京大学文化財研究所（以下、「本研究所」という）の所長、副所長、編集担当委員によって構成する。

(著者の要件)

第2条 投稿原稿の著者は次のいずれかの要件を満たすことを要する。

- (1) 帝京大学文化財研究所教員。
- (2) 帝京大学文学部史学科教員。
- (3) 帝京大学大学院文学研究科教員。
- (4) 本条第1号から第3号の著者との共同研究者。
- (5) 帝京大学大学院文学研究科大学院生。ただし本条第1号から第3号の著者との共同研究とする。
- (6) その他編集委員会が適当と認めた者。

(投稿原稿の要件)

第3条 本誌への投稿原稿で著者として記載されるためには、次の各号をすべて満たすことを要する（ギフト・オーサーシップの禁止）。

- (1) 投稿原稿の研究において企画・構想、または調査・実験・観測に本質的な貢献をしている。または、理論的解釈やモデル構築等で実質的貢献をしていること。
- (2) 投稿原稿の草稿を執筆、または投稿原稿の重要箇所に意見を表明してその完成に寄与していること。
- (3) 内容および結論を著者として承認していること。
- (4) 投稿原稿の内容に関する責任はすべて著者にあるものとし、本誌への掲載で帝京大学には責任が生じないことを著者として認めていること。

2 投稿原稿は、次の各号をいずれも満たす必要がある。

- (1) 第4条に定める帝京大学文化財研究所研究報告の内容を満たし、別紙3の作成方法に則ったものであること。
- (2) 投稿原稿の内容が国内外の学術誌・商業誌・機関紙・書籍等に掲載済みでないこと。またそれらに投稿中でもなく、掲載予定でもないこと（重複投稿の禁止）。

(研究報告の内容)

第4条 広い意味の文化財科学、考古学、民俗学、文化遺産などに関連する以下の論文等とする。

- (1) 論文：オリジナルな研究論文で、新しい知見を含み、結論が明確なもの。
- (2) 総説：すでに発表された論文や学説などを総括あるいは解説したもの。
- (3) ノート：技術・手法などについての報告または紹介。
- (4) 報告：研究等により得られたデータの報告。議論は含まず査読は行わない。

(5) 翻訳：すでに発表された論文や書籍などを翻訳したもの。査読は行わない。

(6) その他：本条第1号から第5号に該当しない書評、討論などで編集委員会が認めたもの。

(投稿原稿の提出、審査と採否)

第5条 投稿原稿は原則として日本語で作成し、指定された形式の電子ファイル(本文、図・表、図・表の大きさを一覧にまとめたもの)を編集委員会に提出する。また、別紙1に定める保証書も提出する。

2 編集委員会は受付処理をした投稿原稿を審査し、掲載の可・不可を決める。

3 編集委員会は第4条第1項第1号から第3号の原稿について、査読を編集委員会構成員以外の有識者に依頼する。この場合も最終的な審査は編集委員会の責任において行うものとする。

4 編集委員会は第4条第1項第4号および第5号の原稿について、編集委員会による審査を行う。

5 編集委員会は第4条第1項第6号の原稿について、査読が必要と判断する場合は本条第3項同様に査読を実施する。査読が不要と判断する場合は、本条第4項同様に編集委員会による審査を行う。いずれの場合も最終的な審査は編集委員会の責任において行うものとする。

6 編集委員会が掲載可と認めたとき(以下、「受理」という)は、編集委員会は受理年月日を記録し、著者に通知する。

7 著者は編集委員会から本条第6項の受理の通知があった場合には、別紙2に定める著作権譲渡同意書に必要な署名をし、編集委員会に提出する。

(校正)

第6条 受理原稿の初校正は、原則として著者が行う(再校正以後は編集委員会が行う)。

2 発行までの時間の制約が厳しい時には、著者による校正を略し、編集委員会が校正を行う。

(著作権)

第7条 本研究所研究報告に掲載された論文等の著作権は、第5条第7項により本研究所に帰属する。

2 本研究所研究報告に掲載された論文等について、本研究所ならびに本研究所により正当に権利を承継した者に対し、著者は著作人格権(公表権、氏名表示権、同一性保持権)を行使せず、これらの者から第三者に対する著作者人格権の行使を要請された場合、それが正当な権利行使である場合に限り、これに応じるものとする。

(論文等のオープンアクセス化)

第8条 学術情報のオープン化を推進するため、発行後すぐに、全ての掲載論文等を「帝京大学研究・教育リポジトリ」および「帝京大学文化財研究所ホームページ」にて公開する。

附 則

この要綱は、２０２０（令和２）年４月１日から施行する。

この要綱は、２０２３（令和５）年４月１日から施行する。

この要綱は、２０２５（令和７）年４月１日から施行する。

保 証 書

年 月 日

著作者（代表者）氏名：_____ 印

所属：_____

原稿表題：_____

署名者が代表する共著者すべての氏名

著作者（代表者）は、帝京大学文化財研究所発行の「帝京大学文化財研究所研究報告」に投稿した上記表題の原稿（著作物）について下記事項を保証し、確約します。

- 1) 著者全員が投稿原稿を読み、投稿に同意していること。
- 2) 著者または共著者が、本原稿の著作権を有していること。
- 3) 本原稿が「帝京大学文化財研究所研究報告」執筆要綱第3条を満たすものであること。
- 4) 受理の採否結果が出るまでの間に、ほかの学術誌および紀要などに投稿しないこと。
- 5) 本原稿が既存の出版公表物などに対する知的財産権への侵害を含まないこと。
- 6) 本原稿中に転載されているすべての図表について、転載許可を得ていること。
- 7) 本原稿中に引用がある場合には、当該引用が公正な慣行に合致し、目的上正当な範囲内であること。
- 8) 本原稿には「帝京大学文化財研究所研究報告」の信用を毀損する盗用、捏造などのデータを含まないこと。
- 9) 本原稿が共同著作物である場合には、本保証書に署名捺印する者が、すべての共著者から本保証書に署名捺印することについて同意を得ていること。
- 10) 本原稿について問い合わせなどが発生した場合、署名者はすべての責任を負うこと。
- 11) 本原稿を作成するにあたって行われた調査研究行為が適切な方法でなされたものであること。

以上

著作権譲渡等同意書

年 月 日

著作者（代表者）氏名：_____ 印

所属：_____

受理原稿表題：_____

署名者が代表する共著者すべての氏名

著作者は帝京大学文化財研究所発行の「帝京大学文化財研究所研究報告」への投稿が、帝京大学文化財研究所研究報告執筆要綱第5条第4項により受理されることを条件に、上記表題の投稿原稿について、以下の各項目に同意します。

- 1) 投稿原稿のすべての著作権を帝京大学文化財研究所へ譲渡すること。
- 2) 投稿原稿について、帝京大学文化財研究所ならびに帝京大学文化財研究所より正当に権利を取得した第三者に対し、著作者人格権を行使しないこと。
- 3) 上記1項と矛盾する契約を他の第三者と締結しておらず、将来においてもしないこと。
- 4) 上記1項に基づいて、本投稿原稿の下記の利用形態に関する権利を帝京大学文化財研究所が排他的に行使すること。
 - a) 複製、翻訳、翻案（出版、電子出版、記録メディアへの記録・掲載など）
 - b) 公衆送信
 - c) 頒布、譲渡、貸与
 - d) その他、本著作物に関する一切の利用

以上

帝京大学文化財研究所研究報告 原稿の作成方法

- 1 原稿の構成は、以下のとおりとする。
 - 1) 原稿には英語の表題と著者名のローマ字書きを添える。
 - 2) 原稿の第 1 ページに著者の所属する機関を書く。
- 2 原稿の文章および文体は以下のとおりとする。
 - 1) 文体はひらがなと漢字による口語常体（である体）とし、現代仮名遣いを用いる。
 - 2) 漢字は常用漢字とする。ただし、固有名詞や学会で広く用いられている慣用の術語はこのかぎりでない。
 - 3) 句読点は読点（、）と句点（。）を用いる。
 - 4) 単位は原則として国際単位を用い、数値と単位の間に半角スペースを入れる。
- 3 原稿の書式は、以下のとおりとする。
 - 1) 原則として、原稿は A4 判書式に 1 行 40 文字×30 行で作成し、周囲に 3 cm 程度の余白をとる。編集委員会から配布する原稿のテンプレートを使用することが望ましい。
 - 2) 原稿の右側欄外に図・表を入れる位置を示す。
- 4 図・表を以下のように定める。
 - 1) 図 (Fig.) : 本文中に入れる図および写真。
 - 2) 表 (Table) : 本文中に入れる記号・文字・罫線のみからなるもの。
 - 3) 図・表はグレースケールで掲載する。ただし、5. に示す口絵としてカラーの図を掲載することができる。
 - 4) 図・表は 1 つごとに個別の電子ファイルを作成する。電子ファイルは印刷したときの品質が鮮明になるように、十分な精度を持った pdf ファイルもしくは jpeg ファイルとする。表についても文書作成ソフトの表ツールを用いず、1 つのファイルを作成する。
 - 5) 図・表にはそれぞれ説明文（キャプション）と mm 単位の印刷時スケールを付加する。
 - 6) 図・表の大きさはキャプションを含めて最大で横 165 mm×縦 235 mm とする。1 段に収める場合は横 78 mm 以内に収めること。
- 5 口絵を以下のように定める。
 - 1) 口絵 : 本誌巻頭にいれるカラーの図および写真。
 - 2) 口絵は 1 ページごとに個別の電子ファイルを作成する。電子ファイルは印刷したときの品質が鮮明になるように、十分な精度を持った pdf ファイルもしくは jpeg ファイルとする。

- 3) 口絵にはそれぞれ説明文（キャプション）と mm 単位の印刷時スケールを付加する。
- 4) 口絵の大きさはキャプションを含めて最大で横 165 mm×縦 235 mmとする。
- 5) 口絵は原則として 1 つの原稿につき 2 ページまでとする。

6 註を以下のように定める。

- 1) 註：既述の文章や専門用語について補足・説明・解説する比較的短い文章。
- 2) 本文中の註表記は以下のとおりとする。

例)

砕葉鎮は、史上最西端に位置する漢人都市であった¹⁾。

画像解析ソフトウェア Image J (1.51j8)²⁾ で二値化処理し、

- 3) 註は本文と引用文献の間に一括し、通し番号の順で並べる。

例)

¹⁾ 山内ほか (2018)、私信。

²⁾ Image J は、オープンソースでパブリックドメインの画像処理ソフトウェアである (<http://imagej.nih.gov/ij/>)。

7 文献を引用したときはそのリストをつける。

- 1) 本文中の文献表記は原則として以下のとおりとする。ただし、著者名のまぎらわしいものは姓名を完記する。

例)

山内ほか (2017) は従来のラバトを第二シャフリスタンとした。

元素分析に基づいた産地分析の有効性が示されている (Muir and Hivernel, 1976; 望月, 1997; Glascock et al., 1998)。

- 2) 引用文献は文末に一括し、和文の文献を筆頭著者名の 50 音順に、続いて外国語の文献を言語ごとにまとめて筆頭著者のアルファベット順 (英語以外の言語の場合は該当言語におけるアルファベット順に相当する順) に並べる。同一著者の論文は、単独論文を年代順に、続けて第二著者の氏名順に並べる。

- 3) 学術誌は次の書式を参考にして記述する。

【著者名】(カンマ)(半角スペース)【出版年】(カンマ)(半角スペース)【論文名】
(ピリオド)(半角スペース)【雑誌名】(カンマ)(半角スペース)【巻数】(カンマ)
(半角スペース)【ページ数】(ピリオド)

例)

金井拓人, 池谷信之, 保坂康夫, 2019, 化学組成データの対数比解析を利用した黒曜石の原産地推定. 文化財科学, 78, 37-51.

Kanai, T. and Takagi, H., 2016, Determination of the stress conditions of the ductile-to-brittle regime along the Asuke Shear Zone, SW Japan. Journal of Structural Geology, 85, 154-167.

Yamaji, A., 2015a, How tightly does calcite e-twin constrain stress. Journal of Structural Geology, 72, 83-95.

Yamaji, A., 2015b, Generalized Hough transform for the stress inversion of calcite twin data. Journal of Structural Geology, 80, 2-15.

4) 書籍・遺跡調査報告書は次の書式を参考にして記述する。

【著者名】(カンマ)(半角スペース)【出版年】(カンマ)(半角スペース)【書籍名】(ピリオド)(半角スペース)【出版社】(カンマ)(半角スペース)【全ページ数】(ピリオド)

例)

萩原三雄, 小野正敏, 2003, 戦国時代の考古学. 高志書院, 614p.

山梨県埋蔵文化財センター, 2014, 上コブケ遺跡. 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 296, 435p.

Moreno, T., Wallis, S.R., Kojima, T., Gibbons, W., 2016, The Geology of Japan., Geological Society of London, 522p.

5) 書籍の一部などは次の書式を参考にして記述する。

【著者名】(カンマ)(半角スペース)【出版年】(カンマ)(半角スペース)【論文名】(ピリオド)(半角スペース)【編集者名】(カンマ)(半角スペース)【書籍名】(ピリオド)(半角スペース)【出版社】(カンマ)(半角スペース)【ページ数】(ピリオド)

例)

青木孝志, 1983, 水晶考古学. 中村龍雄(編), 矢出川 水晶考古学. 55-62.

小野正文, 1998, 釈迦堂遺跡群. 山梨県(編), 山梨県史 資料編1 原子・古代1 考古(遺跡). pp. 100-117.

Stipp, M., Stünitz, H., Heilbronner, R., Schmid, S.M., 2002, Dynamic recrystallization of quartz: correlation between natural and experimental conditions. In: De Meer, S., Drury, M.R., De Bresser, J.H.P., Pennock, G.M. (Eds.), Deformation Mechanisms, Rheology and Tectonics: Current Status and Future Perspectives. Geological Society, London, Special Publications, 200, 171-190.

6) 講演要旨は次の書式を参考にして記述する。

【発表者名】(カンマ)(半角スペース)【発表年】(カンマ)(半角スペース)【発表タイトル】(ピリオド)(半角スペース)【会議名もしくは講演要旨名】(カンマ)(半角スペース)【発表番号】(ピリオド)

例)

植月 学, 2018, 青森県古小川原湾沿岸における縄文時代の古環境と動物資源利用. 日本文化財科学会第35回大会講演要旨, P-11.

Burhan, N., Kanai, T., Takagi, H., 2017, Paleostress orientation estimated from microcracks in quartz grains of the Toki Granite using mixed Bingham

distribution method. Japan Geoscience Union Meeting 2017, SGL36-P12

以上